

隼人の鎮魂と放生

隼人の抵抗が終結して1300年を迎えた昨年は、隼人の名や歴史を郷土史への扉で紹介しました。

今回は少し違った視点から、隼人について考えてみたいと思います。

隼人のたたり

隼人が朝廷に対して起こした、最大で最後の戦いが始まったのは養老4(720)年。戦いは翌年まで続き、隼人の死者・捕虜は1400人余りにも上りました。これにより、朝廷は南九州で戦いがなくなって良かったと安心できるはずでしたが、実はとても大きな不安を抱えていました。それは、亡くなった多くの隼人の霊が、たたりを起すのではないかとという心配です。延暦16(797)年に完成した『続日本紀』という歴史書には、朝廷が隼人

郷土の扉

The gateway to local history

との戦いが終わってすぐに「放生」を行った記録が残されています。放生とは捕らえた魚や鳥獣を放し、災いなどから逃れようとする仏教的な儀式で、その言葉が文献上初めて登場したのは『日本書紀』天武天皇5(676)年の記事です。

『続日本紀』の放生の記録では、具体的に隼人の慰霊に関する文言は出てきませんが、鎌倉時代に編さんされた『八幡宇佐宮御託宣集』には、「宇佐の八幡神が隼人を征服する際に、隼人を多く殺害してしまつたため、その霊を慰めるために放生会を始めることとした」と書かれています。

鹿児島神社の古い記録である『鹿児島神社旧記』にも、鹿児島神社の放生会は隼人の「怨霊」を鎮めるためとの記述が出てきます。これらことから、放生は隼人の慰霊のために行われた可能性が高いと考えられます。

怨霊への恐怖

では人々が恐れていたたたりとは、どれほどのものだったのでしょうか。

国家が明確な形で怨霊を恐れるようになったのは、神亀6(729)年の「長屋王の変」からです。天武天皇の孫である左大臣・長屋王は、天皇の親族ということで大きな権力を持っていた。これに不満を持ったのが藤原不比等の子ともである武智麻呂、房前、宇合、麻呂(通称、藤原四兄弟)です。「国家を傾けようとしている」と密告された長屋王は、宇合らが率いる軍勢に屋敷を取り囲まれたことで自殺してしまいます。これにより、藤原四兄弟は妹の光明子を聖武天皇の皇后に立て、政治権力を握るようになりました。

ところが平安時代の

『日本霊異記』には、土佐国(現・高知県)に流された長屋王の骨のたたりで、多くの人が亡くなったという話が記されています。さらに長屋王の変の後、天候不順や天変地異が発生したり、天平7(735)年に大宰府で発生した天然痘で、翌8年から9年にかけて、藤原四兄弟が相次いで亡くなったたりしています。当時の人々はこれらが長屋王の怨霊によるたたり

だと考えたのです。

ちなみに、『続日本紀』には長屋王についての密告を「誣告(うその内容を訴えて人を陥れること)」と表記しており、公式に冤罪であることを認めています。このような後ろめたさから長屋王のたたりだと考えたのでしょうか。

現代に生きる私たちは、怨霊なんているわけがないと考える人が多いと思いますが、古代の人々は心の底から恐れていたのです。このことから、隼人の霊を慰めることによって災いを防ぐことができるかと考えたのでしょうか。

(文責 坂元)



10月の鹿児島神社隼人浜下りで行われる放生会



放生会と隼人の霊について述べた『鹿児島神社旧記』